

子規俳句潺潺 7

—明治三十一年

宮坂敏夫

祇園の鴉愚庵の棗くひに来る 明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。秋、木に出る。新聞「日本」（明治30年10月25日）に載る。『春夏秋冬』秋之部、棗にも出る。表記下五が「喰ひに来る」。

『新俳句』（明治31年3月刊）巻末につけた愚庵十二勝のうち「棗子逕」と題した愚庵の漢詩に和したのが掲出句。

愚庵は天田姓、天竜寺の滴水禪師につき禪門に入り、京都東山区清水の産寧坂に草庵を結んでいた禅僧。子規以前に万葉調の短歌を詠んでいた歌僧としても知られる。

愚庵十二勝とは愚庵が明治二十八年（一八九五）に身辺の十二の勝れた景色をうたった漢詩。ただし、景色は囑目の景ではなく、「和尚胸中の反映」（子規居士の周鼎「柴田肯曲・六甲書房刊」とでもいうような想像の景色である。その漢詩に子規の唱和を求めたもので、子規は門下の俳人にも作らせ、俳句で応えている。愚庵の「棗子逕」を掲げる。

古逕夕陽深 山禽鳴不聒

棗紅大似瓜 仙客来医渴

むかしからの小道に夕陽が射し、山鳥の声はかまびすしくはない。紅い棗の実の大きさは瓜くらい。風流な客がやって来て、口にし、渴をいやすとの意。

子規は、当初二十九年（一八九六）に、行脚より帰れば棗熟したり

と和し、「松蘿玉液」（「日本」明治29・12・24）に発表したのが、翌年掲出句を作り、『新俳句』の愚庵十二勝「棗子逕」には、後者を採り入れた。掲出句が詠まれたのは、明治三十年十月二日子規庵の俳句例会、第一回運座で、棗が席題。そのときの表記では「鴉」が「鳥」とある。出席者は子規の他、梅沢墨水、中本恕堂、福田把栗、竹村秋竹、栗田木岡、佐藤肋骨、折井愚哉、弘光春風庵、河東碧梧桐の十人。句会では、墨水が天に抜き、碧梧桐、春風庵、愚哉が点を入れ、高句句である。愚庵の棗は子規門にあっては知られており、掲出句を運座でみた連衆は、当然「棗子逕」の漢詩を思いうかべたにちがいない。

祇園は八坂神社門前町から発展した京都を代表する遊里。愚庵の草庵と五〇〇メートルほどの距離にある。

一句は、祇園の色街に棲みついていて鴉がこともあろうに、愚庵

の庭先の棗を食い荒しにくることよとの意。

その対照の妙に興じたものであるが、もうすこし穿ち、「愚庵など悟ったらしい顔付をして居っても、ドウチャあの鴉にはかなうまい、とからかった内に、棗は鴉のついはむに委せた愚庵の坦懐を褒めたのである」(『(冬)子規俳句評釈・寒川鼠骨』)という見方がおもしろい。

愚庵の「棗子逕」中の第四句。「仙客来医渴」の仙客を祇園の鴉とみた意外なおかしさが子規の得意なところ。俳諧味を生かした唱和の心得を子規はよく会得している。

つり鐘の帯のところが澁かりき 明治30年

『俳句稿』(明治三十年)所収。秋、木に出る。「つりがねといふ柿をもらひて」と前書がある。新聞「日本」(明治32年9月16日)には「愚庵よりつりがねといふ柿をもらひて」として、「御佛に供へあまりの柿十五」とともに載る。

『病状手記』(明治30年)の十月十日に「桂湖村京都ヨリ帰ル。愚庵ノ柿(つりがね)十五顆^①及ビ松茸ヲ携ヘテ来ル」とメモが書かれ、掲出句をはじめに、柿十一句が羅列されている。掲出句の表記が「つりがね」と仮名、へたは、「帯」(帯と同字)とある。前書も「愚庵の柿つりがねといへるをもらひて」と贈り主を明らかにしている。

「つり鐘」(柿)は晩秋の季語。形が釣鐘に似ているので、名づけられたもの。帯は、実についている萼^{がく}。帯といったので、つり鐘が柿の実だということがはっきりした。「澁かりき」と、体験的な事実を端的にいい切り回想している点があざやか。

一句は、愚庵がつりがねという珍しい名の柿をくれた。早速食べた。帯のところが澁いのがうまかったという意。

掲出句は、つり鐘という詠い出しから、途方もない大きな鐘を想像し、それが帯という一語によって、イメージが小さな柿の実に置換せられる。その途惑いを無視したかのように、きっぱりと「澁かりき」といい切る。意味は単純明快な句でありながら、一句のつぎつぎに変わる映像は、残像と重なり、微妙な味わいを醸し出している。

「釣鐘といふ名などについても、唯甘いとか旨まいとか言ふのみよりは、帯の澁いといふところに稍々調和するところがある。」(『子規句集講義』・内藤鳴雪)とは、首肯される鑑賞だ。贈り主が禅僧であるだけに、好意に謝するのに、つり鐘柿の澁さを讀えた点がふさわしい。

柿の実の帯のところが澁いという、日常の些事にすぎないことを大問題であるかのように表現した、思いきりのよさが一句のいちである。「此句の如きは軽妙を生命としたほんの即興の句には過ぎないけれども、其実際の事実を捉まへて来たと言ふ一種の写生手段が十二分の働きをして居る」(『子規句集講義』・高浜虚子、傍点虚子)とは、即興句における写生の妙味、すなわち意外性の発見を指摘しているのである。

同じ時の作、

稍澁き佛の柿をくらひけり(のちにもらひけり)

御佛に供へあまりの柿十五

柿熟す愚庵に猿も弟子もなし

右の句も印象に残るが、掲出句の端的な率直さにはかなわない。

愚庵へ柿の礼状を子規がしたためたのは、二週間余後であった。

その翌日、桂湖村が一枚の端書を子規に見せた。そこには、愚庵の六首の歌が書かれていたが、うち一首「正岡はまさきくてあるか柿の実のあまさきともいはずしづきともいはず」は子規に関するものだった。子規は早速、次の二首を含め、六首の短歌を贈った。

柿の実のあまさきもありぬかきのみの澁きもありぬしづきそうまき

あまりうまきに文書くことそわすれつる心あるごとな思ひ吾師

(圈点は子規)

子規は「俳諧歌とでも狂歌とでもいふへきもの」(愚庵宛子規、明治30・10・29)とっているが、柿の実の一首と掲出句とを比べるならば、読み手の想像に任す余地を、「しづきそうまき」といわざるを得ない短歌表現にいいおこせる退屈さが感じられる。

三千の俳句を（けみ）閱し柿二つ 明治30年

『俳句稿』(明治三十年)所収。秋、木に出る。「ある日夜にかけて俳句函の底を叩きて」と前書がある。前書の意は、子規の枕元にある投稿入れの俳句函にたまっていた句稿をすべて見終つてというのである。

明治二十六年(一八九三)三月六日に新聞「日本」の俳句欄が設けられて以来、年々増える全国からの投句は、新聞社から子規のもと

へ届けられる。妹の律が開封し、俳句函の下へ入れる。子規はそれを選句し、十八行の日本新聞の原稿用紙(題が一行、十七句書き)に記入する。

「三千の俳句」は、子規選を受けるために寄せられた多数の句稿。三千は数の多いことの称。「閱し」は調べる、あらためる意で、こゝは句稿に目を通し選句すること。「柿二つ」は、単なる取り合わせの意ではなく、「食へり」という述語が省かれた俳句特有な省略表現。一句は、ある日、夜更けにかけ、根をねつめて投稿のやまの一句一句に目を通す。どうやら枕元の俳句函をからっぽにした。ほっとし一気に平らげた柿二つ。なんとうまいことよとの意。

初案は、「三千の俳句を（しほ）點し柿二つ」、再案「俳句に點し」、三案で掲出句の形になったという。(「故正岡子規氏」、「はたてがひ」・直野碧玲瓏) 『新俳句』編纂中の直野碧玲瓏宛書簡(明治30・12・10)に書かれている点からすると、『新俳句』収録句の選句とも、「俳句分類」の仕事(子規名句評釈「甘田五彩」)とも受けとられるが、上述のように、普段の選句の場と考えた。

「彼は凡てのものに健啖である中に殊に菓物を好んで食うた。中にも柿は飽くことを知らなかった。彼は忽ち食指が動いたのだが、唯二つの柿を今食ってしまったふことは心細かった。其れは是非共今日の大事業——投書函の一掃——が完了した時の慰藉の料に取つて置かねばならなかった。彼は心のうちで呟いた。「選がすんでしまったら此柿を御褒美に遣るよ。今一息だ。たゆまずに片付けてしまへ。」と。斯くて漸く底の見えて来た句稿の選に更に一心不乱に取り掛つ

た。』(『柿二つ』・高浜虚子)

右は、この年から没するまでの子規の生涯を描いた虚子の『柿二つ』(大正四年元旦から二十四連載)から、掲出句の鑑賞を施した場面である。「柿二つ」を、先のたのしみに取っておく意と解している点、一異見とみたい。

柿好きの子規には、次のような句もある。

文売らん柿買ふ銭の足らぬ勝

明30

柿喰ひの俳句好みしと伝ふべし

後者には「我死にし後は」と前書がつく。掲出句もわが糧である

二つの柿を食べたいばかりに、三千の句稿を平らげたようなものである。

句を閲すラムプの下や柿二つ

明32

「柿二つ」は、子規の生の象徴のように、子規のあらんかぎり輝いている景物である。

蓮の実の飛や出離の一大事

明治30年

『俳句稿』(明治三十年)所収。秋、草に出る。「病牀手記」によると、九月二十六日の作。表記「飛ぶ」と送り仮名がある。他に新聞「日本」(明治32年10月3日)に「蓮実」と題し載る。『春夏秋冬』秋之部、蓮実飛ぶにも出る。

子規は、掲出句より二週間前九月十二日に蓮実飛、雀爲レ蛤、蛇入レ穴それぞれ十句を作って、大いに興を掻き立てている。蓮実飛十句中から注目する句を掲げる。

結伽して蓮の実の飛ぶ音聞ん

極楽は蓮の実飛で月丸し

蓮の実の天女五衰の夕飛ぶ

蓮の実の皆西へ飛ぶ夕哉

右の句はいずれも寺や仏にかかわるもの。結伽は結伽趺坐の略。仏像の座り方、あるいは座禪の形をいったもの。天女五衰は天人が臨終のときに現われる五つの死相のこと。

蓮の実は仲秋の季語。掲出句のように、蓮の実飛ぶの形でも用いられる。蓮の実は蜂の巣状に窠孔が並び、黒い種子が穴からとび出て水に落ちる。蓮は寺院につきものである。蓮実飛十句の例のように寺や仏と結びつけ連想されるのはごく自然。しかし、連日三十八度の発熱に呼吸が苦しいと手記にメモし、「朝鼻血少シアリ、昨日医師ノ話ニ腎ノ下ノ痛ミノ処ニケ処イヨイヨ穴アキタリト、二三日前ヨリ膿出初メタルナリ」(九月二十一日)という病臥の子規が極楽や天女五衰の夕などを想像するのは、病状の回復おもわしくなく、気弱になっていた証左であろう。

掲出句の出離とは、現世の欲望や迷いを断ち悟りをひらくこと。さらに出家の意にも用いられる。一大事は仏語でいう、仏出世の重大事の意から、こゝは悟りを開ききつかけのことである。

句意は、蓮の実がボンと飛び出すのを見たことがきつかけで、ふと悟りを開くことになったというのである。

蓮実飛十句でかならずしも満足した作ができなかった子規が、季語に執着し、「出離の一大事」との着想から、ふとできたもの。ある

いは子規は、蓮の実が飛び出す様子を出離の一大事と比喻のようにみたのかもしれない。切字やを「は」の意に用いた例である。しかし、こゝでは前者、や切れの形の上から、取り合わせの句とみておきたい。

屋根葺のごみ掃落す芭蕉哉 明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。秋、草に出る。「病牀手記」十月九日に、「秋の空伽藍の屋根をありく人」と一緒に記されている。表記「屋根ふきの」とある。嘯目吟か想像句かわからない。あるいは「屋根」を詠み込んだものか。『春夏秋冬』秋之部、芭蕉に出る。表記中七が「ごみ掃き落す」とある。新聞「日本」（明治32年11月8日）に「芭蕉」と題し載る。

屋根葺は春の農繁期前や秋の取り入れ後に行われ、前者が多いことから春の季語とされている。しかし、掲出句は芭蕉が初秋の季語なので秋の葺替を詠んだもの。

屋根葺は、民家の屋根には萱が多く使われ、一代三十年に一度の大仕事といわれていた。萱を集めるのが困難な地方では麦藁が用いられ、他に薄板（木端）や杉皮などでも葺かれた。が、明治から大正にかけて、萱や麦藁は瓦やトタンに変わった。昭和になると、瓦葺が八割、トタン葺が一割、他の一割が麦藁であるという。（明治文化史）第十二巻生活、渋沢敬三編、原書房）寺社の屋根などは檜皮葺も多い。

掲出句は、葺きあがった屋根のごみを掃き落とすところか

ら、萱葺とは受けとれない。萱葺は古い萱を剥ぎ取るだけで、四辺はもうもうと塵埃が立ち、庭木などもすっかり汚れてしまうからだ。掲出句と同時に詠まれた先掲の作は「伽藍の屋根をありく人」とある。寺の屋根である。とすると、こゝも寺の景と受けとり、柿葺のような板屋根の葺替と考えられようか。軒先の芭蕉葉に、高い屋根からごみが掃き落とされ、芭蕉無惨のありさまである。

芭蕉は古くから渡来した中国産の大形多年草。高さは五メートルにも達し、葉は広く長楕円形。「いづれのとしにや、栖をこの境に移すとき、ばせを一もとを植う。風土、芭蕉の心にあやひけむ。数株の茎を備へ、その葉、茂り重なりて庭を狭め、萱が軒端もかくるばかりなり。」（芭蕉を移す詞・三日月日記）と松尾芭蕉の俳文にもある通り、その広葉に風雨のあたる音や風に破れたあわれが愛され庭園や寺院に好んで植えられた。

『分類俳句全集』第九巻秋の部、植物に出る芭蕉の一四二句いずれも雨、月、風、雪、露などと取り合わせたり、破れ芭蕉のさまであったり、秋の風情を掻き立てるものばかり。

- 芭蕉野分して鹽に雨を聞夜哉 ばせを
- くるゝ程芭蕉にひゞく虫の声 許六
- 物書くに葉裏にめつる芭蕉哉 蕪村
- 露晴れて露の流るゝ芭蕉哉 白雄
- 芭蕉葉は破れたるこそはせをなれ 団水

右はそのわずかな例。芭蕉には、傷つきやすく、繊細な詩人がおのれの気持を托すべきさみしさや孤独感がその本意として詠われる

ようになる。

子規の句は、芭蕉の本意を無視したところで詠まれている。そこに子規のサバサバした快感があった。

右に例示したような俳句分類作業を行ない、「俳人蕪村」を新聞「日本」に連載している。そのあいまの作句が、掲出句である。おのれの作句のどこに新味があるか、子規はよくわかっていたのである。

追々に狐集まる除夜の鐘 明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。冬、時候に出る。「王子」と前書がある。除夜の鐘が晩冬の季語。

前書によって、王子権現（王子神社）境内にある王子稲荷の狐火を詠んだものと知られる。王子の狐火として、江戸時代から名高い。

『江戸名所図会』（天保七年）によると、稲荷神社付近の装束、衣裳、榎の下に、大晦日の夜、関八州の狐が集まり、その総司たる王子稲荷に、来年の官位を請うたと伝えられ、「そのともせる火の連なりつゞける事、そくぼくの松明を並ぶるが如く、数斛の螢を放ち飛ばしむるに似たり。その道、野山を通い河辺をかよへる不同を見て、明年の豊凶を知ると聞ゆ。」とある。

年の一夜王子の狐見にゆかん

素堂

右の山口素堂の句も王子の狐を詠んだ代表作。

掲出句は、いよいよ除夜の鐘の鳴る刻が近くなり、関八州から追々に狐が集まり、その狐火の数もだいぶ多くなったというのが句意である。

『蕪村句集』には、次のような狐火の句がある。

狐火やいっこ河内の麦鼻

蕪村

狐火に燃つくはかり枯尾花

いずれも『分類俳句全集』第十一巻から。『蕪村句集』に夢中の子規は、蕪村好みの狐火を季題に河内の狐火ならぬ王子の狐火を詠ったもの。ところが、「追々に狐集まる」という十二音から明年のおのれの豊凶いかにと、いささかさみしい思いにとらわれているのかもしれない。

フランスの一輪ざしや冬の薔薇 明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。冬、時候に出る。新聞「日本」（明治31年1月16日）に「冬籠」と題し載る。

子規は時候冬を季語としているが、私は、「冬の薔薇」、すなわち冬薔薇を季語とみる。薔薇は「古今集」巻十、物名に「さうび」と題し、「我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりり つらゆき」とある。私は今朝初めて薔薇の花を見たが、まことに華やかなものといわねばならないのが大意。大陸から早く渡来し、俳諧でも、『毛吹草』（正保二）に四月と出て以来、夏の花として知られているが、冬薔薇が詠われるのは掲出句がはじめてである。薔薇は花期が長く、霜枯の中に一輪、二輪咲き残っている光景は華麗な花だけに、孤高な感じがある。

冬枯の垣根に咲くや薔薇の花

明26

『新俳句』や「瀬祭書屋俳話」選句集にも採られているが、これ

は冬薔薇ではなく、冬枯の例句である。

掲出句でも、子規みずから冬の時侯の項に分類しているように、明確に新題季語「冬薔薇」と決め得なかつたころの揺れはあろう。

が、国名フランスを詠んだ十二音は、冬薔薇を季語とするにふさわしい設定である。熱いラブコールがとどけられたも同然。

フランスを上五に冠せ、詠ったのは、拾遺句を除くと、次の二句のみ

ふらんすに夏瘦なんどなかるべし

明 29

フランスの蕈を封す書信かな

明 31

夏瘦の句には、「佛国にて写されたる叔父君の写真を見るにいたく肥え給ひければ」と前書がある。加藤拓川の留学先で写した写真をみての即興吟である。

フランス製の一輪ざしがある。冬枯の中に咲き残っていた冬薔薇を差してある。いかにも似つかわしいの意。

フランスと冬薔薇とのことばのひびきは、瀟洒である。国名フランスを句中に生かしたのも、子規がはじめてであろう。

薔薇の花マリーと呼ぶは妹なり

明 31

阿蘭陀（おらんた）の昔更紗や薔薇の形（かた）

明 31

人名、国名を呼んだ、こんな句も子規にはある。

燕引く頃となりけり春星忌

明治 30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。冬、人事に出る。明治三十年（一八九七）十二月二十四日、根岸子規庵におけるはじめての蕪村忌の席題

句である。句会稿が『子規全集』（講談社版）第十五巻俳句会稿に入っている。さらに、当日のもようは「蕪村忌」（ほととぎす第十三号、明治 31・1）にくわしい。それによると、会する者二十人。たゞし、内

藤鳴雪と諫早李坪は句会には参加しなかつたが、鳴雪の句「大蕪小蕪さては赤蕪我老矣」が手向け句として句会稿には、追加されている。庵主子規の句は、掲出句の他に、次の句がある。

蕪村忌に会して終に年忘

運座の後、晚餐となり、庵主僅に酔って、右の句を大書したところ、碧梧桐、虚子とこれに和す。

会すんで酒に酔ひけり年忘

碧梧桐

天王寺の蕪喰ひけり年忘

虚子

「一坐哄然として笑ふ、衆皆之に倣ふて句を成す、紙躍り灰飛ぶ、鬼神も泣き処女も泣く」「天真爛漫眞摯愛すべきの処は却て此に在り」（「蕪村忌」というありさま。

これより先、当日は午後一時に集まり、一同記念撮影を庭前に行ない、その後、運座。八畳の座敷、六畳の病間に客が入り、火鉢や坐蒲団が足りないという盛会であった。句会後の宴會に、風呂吹が出、酒三杯蕪一皿がくばられる。蕪は、大阪の水落露石より贈られた天王寺蕪であった。以後、風呂吹と蕪を蕪村忌に食べるのが例になった。

「蕪村とは天王寺蕪の村といふ事ならん」（「俳人蕪村」といわれ、ぜひとも露石から天王寺蕪を間に合わせて貰ったもの。露石は、大阪に満月会を創った日本派の推進者で、また蕪村の研究者でもあった。後に、明治三十三年（一九〇〇）『蕪村遺稿』を出版し、関西におけ

る蕪村派の中心として活躍した。

掲出句の春星忌は蕪村忌の別称。天明三年（一七八三）十二月二十五日没、六十八歳。よって、陰曆十二月二十五日が忌日である。蕪村は本姓谷口、名は寅、字が春星。別号がたくさんあり、はじめ宰町さらに宰鳥と改号。蕪村を用いたのは二十九歳、下野宇都宮で歳旦帖を編んだときである。他に落日庵、紫狐庵、三菓軒、夜半亭、夜半翁などの別号、子漢、四明、東成、長庚、謝寅など数多い画号がある。春星は画号としてもしばしば用いている。

蕪引も初冬の季語。ちやうど蕪村忌の頃が蕪を畑から抜きとる時期にあたるというのである。「就中天王寺の境より産出するものは肥豊・短円で、蟠屈（たけの伸びぬこと）であり、その味は香美・甜脆である。土地の人は醃蔵・糟漬にし、また晒乾し、これを全国に出荷している。（『本朝食鑑』）子規は当然、蕪村の生地、摂津国東成郡毛馬村の天王寺蕪を頭に描いていたものであろう。

一句の工夫は蕪引に蕪村忌では陳腐、そこを春星忌といい改めた点にある。忌日には季感が乏しいので、蕪引の季語を用いたのも、季重なりの感じがしない。むしろ率直な句柄だという印象が強い。子規のもうひとつの蕪村忌詠も季語年忘が入っている。蕪村忌を修すために集まった面々が、いつか年忘の酒宴に盛りあげてしまったというのである。

ちなみに、当日の席題詠で、蕪村忌の作者名が判明する句のみを次に記す。

冬されの蕪村といへる人ありき

紅緑

蕪村忌の人会したる写真かな

愚哉

蕪村忌や風呂吹に贊の句は成りぬ

秋竹

蕪村忌や霜柱踏む金福寺

虚子

庵狭し蕪村を祭る蕪汁

碧玲瓏

水仙や白梅や会す蕪村の日

墨水

蕪村忌や人に寄せたる大蕪

東洋

忌に当り発句に会し蕪汁

繞石

蕪村忌につめたき昼の灯かな

森々

其夕古人を夢む枯薄

春風庵

なお、子規には、当日句ではないが、蕪の贈り主露石を詠んだこんな句が、この年にはある。

蕪村忌や蕪よせたる浪花人

明30

緋の蕪の三河嶋菜に誇つて曰く

明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。冬、草に出る。前書「根岸の草庵に故郷の緋蕪をおくられて」とある。蕪は兼三冬の季語。

子規の郷里松山からとどいた緋蕪が三河嶋菜に、その味を自慢して云々といったというのである。三河嶋は北豊島郡三河嶋村。のち大正九年（一九二〇）に三河嶋町となっている。子規の頃、三河嶋は東京近郊の農村地帯で、大根の産地であるが、漬菜も特産品であった。

掲出句のおもしろみは、その句形にある。これは、杉山杉風の「常盤屋の句合」第十八番「だい／＼を蜜柑と金柑の笑て曰」の句形をも

じつたものか。青物を詠み込んで、その対比というのも同想である。子規には他に緋燕を詠んだ句がある。たゞし、いずれも緋燕を季物として用いず、他に春の季語を入れている。

緋の燕や膳のまはりも春けしき 明26

緋の燕尽きて紅梅の散らんとす 明29

右の緋燕は冬の間に故郷から送られたものとして、愛着を読みとらないと、なぜ緋燕を詠んだのか、ほとんど意味をなさない。

豆腐屋の来ぬ日はあれど納豆売 明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。冬、人事に出る。新聞「日本」（明治32・11・26）にも載る「病牀手記」によると、十一月十二日の作。同時の作に、こんな句がある。

納豆買ふ屋敷もふえて根岸町

右の句と合わせてみると、掲出句も根岸嶋目詠である。長い前書がある。「声涸れて力無き嫗の朝な／＼に呼び来る納豆の辛き世こそ思いやられるれ」。納豆は納豆売の意。

子規自身病者であればこそ、いっそう納豆売の嫗の身の上に、そのものがなしい売り声から同情を寄せたもの。

句意は、豆腐屋の来ない日はあるが、納豆売は毎朝かならずやってくるということなのである。

納豆売は季語ではない。納豆売は兼三冬の季語。江戸時代から納豆は詠まれているが、納豆売は珍しい。子規の納豆売への人間的なあたたかみを感じられるいい句だ。

乾^{かほろぎ} 鮭^{さけ}や市に隠れて貧に処す 明治30年

『俳句稿』（明治三十年）所収。冬、動物に出る。他に新聞「日本」（明治31・1・16）に載る。『新俳句』、『春夏秋冬』冬之部にも採られている。乾鮭が兼三冬の季語。乾鮭は干した鮭。腸を除いて長期間乾燥させたもの。食べるときには、四、五日水に漬け、堅さをもどす。保存食として年中用いられたが、とりわけ極寒を凌ぐ、薬喰^{くすりぐい}の類と考えられていた。

乾鮭というと、次の句は周知のところ。

乾鮭も空也の瘦も寒の内 芭蕉

ところが、乾鮭は季語でなく、寒の内が季語。江戸時代の主要な歳時記では、乾鮭を季語としてあつかわず、『増補俳諧歳時記菜草』（馬琴・嘉永四）にようやく冬十二月の季語となっている。

乾鮭を好んで詠んだのは蕪村である。『分類俳句全集』には、乾鮭の項に蕪村の次のような句が掲げられている。

※乾鮭や琴^{きん}に斧^{きりぎり}うつ響あり 蕪村

※から鮭に腰する市の翁哉
年守や乾鮭の太刀鱈の棒

※から鮭や鳶もすさめぬ市の中
から鮭の骨にひよくや後夜の鐘

※から鮭の片荷や小野の炭俵
※乾鮭や帯^{おび}刀^や殿^{どの}の台所

※詫禪師乾鮭に白頭の吟を彫

右の句のうち※印は、『蕪村句集講義』にもとりあげられており、子規にとり、乾鮭は芭蕉よりもまず蕪村を追慕するよすがとなった季物である。こゝに掲げた蕪村の句をみると、第一句目は、「倣素堂」と前書がある。素堂ばりの佶屈調を蕪村が倣なまったもので、乾鮭を叩いて発する音は、琴の響きといたいだが、さしずめ斧で打つ時の響きだの意。第二句目の「鮭に腰する」は、店先に積まれた乾鮭に無雑作に腰掛ける翁を描く。乾鮭あわれ。第六句目は乾鮭と小野の炭俵を天秤棒のそれぞれ振り分け荷にしたというもの。乾鮭の佶しさをしのばせる。第七句目は能因が袂から井手の鮭の乾物を出すと、帯刀が長柄の橋のかんな屑を出したという歌詠みの通人ぶりを茶化した故事がある。その帯刀殿には台所に乾鮭があろうと想像したものの、第八句目は佗びた坊主が乾鮭の身へ、老を嘆いた白頭の吟を彫るといふ、凝った句。

右のように、子規が注視した蕪村の句を一瞥すると、掲出句「市に隠れて貧に処す」のありさまが、彷彿としてこよう。「市に隠れて」とは市隠しいんという語があるように、官につかないで市井に隠れ住む者のこと。「江戸前の市隠、式亭三馬」「東京市隠、仮名垣魯文」などの用例のごとく、単に町中の隠者というのではなく、官途の束縛をきらい、気まゝに、だれからも拘束されずに、人情に通じて生きる在野の主張がそこには感じられよう。

乾鮭は市隠にとり、寒中のお訴え向きの食物。いささか蕪村の句調に似すぎないが、ないでもない。しかし、子規俳句の特徴は、

「市に隠れて」「貧に処すと漢語を用い、蕪村調ではあるが、蕪村のような故事来歴を踏まえたり、凝った文人趣味嗅を抜け出した点にあらう。句意に裏の意がなく、さっぱりしている。

乾鮭の切口赤き厨かな

明30

同じ時期の乾鮭の句として、『新俳句』に採られているが、子規俳句の淡泊で嫌味のなさがうかがわれる作である。

めでたさも一茶位や雑煮餅 明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。新年に出る。翌三十二年（一八九九）の賀状に刷り込んで、佐々木信綱他に出している。年賀葉書には、賀正と頭書にあり、主文が「新年めでたく候 皆様めでたく候 私もめでたく候」と書かれ、主文を四方から囲んで、新年の句が八句掲げられている。掲出句はそのうちの一句。

季語は「雑煮餅」、新年。掲出句は、いわば一茶の句の本句取りである。

目度めでたさもちう位なりおらが春

一茶

右の句は、『おらが春』の冒頭に、初めて正月を迎える長女さとを詠んだ「這へ笑へ二つになるぞけさからは」の一句とともに出る。

文政二年（一八一九）、一茶五十七歳の歳旦吟。長い流離の果てに郷里の柏原かしわばらに帰住して五年、人並みに妻を娶り、子をもうけ、俳諧師としても、信州の東北信地方の郷村を中心に、門弟を擁するようになる。一茶の句には、前書がつくが、その大意は、屑家くすや住みの身には、正月の支度に門松を立てたり、煤すす払いをしたり気をつかうこ

ともなく、すべてあなた任せの他力本願でいこうというのである。

「ちう位」とは、本来は上位に対し中程度の意であるが、こゝはごくいい加減、あいまいの意。信州の方言で「ちゆうぐれい」という。

新年を迎える喜びも、あなた任せに世を渡る老い先の知れた身には、まあいい加減なものだが、それがおれにふさわしいではないかというのが一茶の句意。

掲出の子規の句は、本句の「ちう位」を「一茶位」に転じたもの。

一茶の生涯をふりかえり、おのれの境遇とかさねて共感しているが、総括すると、「ちう位」の意を踏襲し、生かしていよう。

子規俳句 潺潺 7
一茶は北信濃の柏原生まれ。三歳で生母と死別し、継母にいじめられ、十五歳で江戸に出、五十一歳にして帰郷するまで三十五年間、下総や西国の讚岐観音寺、肥後八代、伊予松山、大坂、京都と知友を頼って転々としながら、江戸の夏目成美らの庇護により、葛飾派門、二六庵の俳諧師のくらしをつとめていた。帰郷後、結婚し三男

一女をもうけたが、いずれも夭折、妻の死、再婚、離別と不遇な状況の中で、執念の終の栖も火災で失ない、焼け残りの土蔵に中風の身を横たえ、六十五歳の生涯を終える。最後に迎えた妻が一茶死後出産し、かろうじて血筋がつながるといふ波瀾の生涯であった。

句意は、新年を迎えたためたさも、相変らず病臥の身にとつては、一茶位、「ちう位」のものだと思ひながら、元旦の雑煮餅を食べていることよというのである。

子規が「俳人蕪村」を書き、蕪村俳句の現代性を讀めたのが、前

年三十年（一八九七）であった。意匠の美しき、用いることばの豊富さ、句法や句調の新しさなどからみて、技量は俳句の神さま芭蕉よりも上だといった。たゞ一つ蕪村俳句に欠けているのは、こういう点だと書いた。

「真摯なる、単一なる、小児の如く無邪気なる俳句は俳句の一体として存すべきには非るか。蕪村は実に此種の句を有せざるなり」

（俳人蕪村拾遺（上）日本附録週報・明治30・11・22）

このときに、子規は、芭蕉ではなく、一茶を蕪村と対比して考えていたのである。同じ年に『俳人一茶』（宮沢義喜・宮沢岩太郎編、三松堂・松邑書店、明治30・7・5刊）の付録に「一茶の俳句を評す」という短い文章を書いている。その中で、一茶の特色は、滑稽、諷刺、慈愛の三点にあり、なかでも、滑稽は、一茶の独占するところで、擬人法を用い、俗語を生かして軽妙な句をつくることで、俳句界数百年間、わずかに似た者さえないといっている。

子規の一茶評価は、今日ではもっとも通俗的に誇張され喧伝され、代表的な一茶観になっているが、明治期において、いち早く一茶に注目したのが子規であった。一茶の生涯とその俳句を世に広く知らしめた東松露香の名著『俳諧寺一茶』（一茶同好会、明治43刊）のようになった「信濃毎日新聞」紙上での連載がなされたのが、三十二年であり、子規の二年後であった。蕪村ばかりでなく、一茶の独自さを推奨したのが子規であり、その点、掲出句に一茶への親近感がこめられているのである。

雪解や竹はね返る日の表 明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。春、天文に出る。「春夏秋冬」春之部に入り、新聞「日本」（明治34・4・6）に雪解と題し載る。初出は三十一年春の子規庵での連座。「雪解」の題詠。子規を囲み十一名の参加者があったが、掲出句には、青木森々（松山、松風会員）、坂本四方太、石井露月などが点を入れている。他に点の入った、

越山の雪とけて北海の波高し 豆勇

このような句と比べると、子規の写生がいかに確な場景把握にすぐれているかがわかる。

雪解は仲春の季語。雪の降りつもった翌朝の竹林風景。日が闇けてくると、頭を垂れていた竹がびいんと跳ね返る。そのたびに、竹の葉叢に積っていた雪がどどと根元に雪崩れ落ちる。中七から下五にかけて、場景に動きがあり、映像もあざやかである。「日の表」は、日の射すところ、日向の意。

子規の雪解十七句中、リズムよろしく、構図に生彩ある句として記憶にとどめたい。

水口に集まつて来る田螺哉 明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。春、動物に出る。新聞「日本」（明治33・4・22）に田螺と題し載る。「水口」はみなくち。井戸や川の水を田へ引き入れる取り口のこと。田螺は三春の季語。「集まつて来る」の擬人化表現が田螺だけに効いている。

絶えず水が動き、さざ波立つ水口は、一見、田螺には住みごころがよろしくないと思われる。ところが、水が淀んだぬるみよりも水口に田螺が集まるという着想に新鮮味がある。句意は以上の鑑賞で足りるだろう。

桃咲くや古き都の子守唄 明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。春、木に出る。初出は「ホトトギス」（明治32・2）の東京俳句界報告で、「子」詠み込みの一句。右の作句状況からしても、囑目吟ではない。二物を取り合わせ、調和ある場景をつくり出す想像句である。桃の花が晩春の季語。

古き都が奈良とか京都とか特定しないで、古き都と懐古的ないい方をし、さらに、子守唄といちだんと情緒を醸し出す五音を揃えている。このような詠い方は子規が「俳人蕪村」で蕪村俳句の特色としてあげた「理想的美」にあたる。すなわち、「今人にして古代の事を詠み、いまだ行かざる地の景色風俗を写し、かつて見ざる或る社会の情状を描き出す者これなり」というのである。写真（理想的に對し実験的という語を用いている）だけでは、「尋常一様の経歴ある作者の文学は到底陳套を脱する能はざるべし」（「俳人蕪村」という傾向になるのが必定。よって無碍自在な空想による俳句も詠まれることになる）といふのである。

掲出句の眼目は、桃の花のもつ古風さと以下の揚景とがつくり出す一幅の絵のような夢幻の美にある。桜でも梨でも山吹でもいけない。桃の花のもつ、窈窕たる、現実離れた美しさが生かされている。

る。

蒲公英やローンテニスの線の外 明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。春、草に出る。『春夏秋冬』春之部にも入る。初出は「ホトトギス」（明治31・4）に「蒲公英」と題し載る。蒲公英が三春の季語。

子規には蒲公英の句が二十七句ある。うち三十一年に十句詠んでいる。掲出句以外にこんな句がある。

馬借りて蒲公英多き野を過る 明31

蒲公英に砲台古りし岬かな

蒲公英に人の参らぬ地藏かな

蒲公英に描きそへたる土筆哉

蒲公英の小路左へ分れけり

蒲公英や記念碑を彫る路の端

蒲公英や釣鐘一つ寺の跡

名を埋む野辺や蒲公英一杯の土

庭に咲く蒲公英に詩の思ひあり

蒲公英の連作意識があるわけではないが、蒲公英への好みは、燕村からの影響であろうか。右の例句中の最後の「蒲公英に詩の思ひあり」の詩は、あきらかに燕村の「たんぼば花咲けり三々五々五々は黄に／三々は白し記得す去年此路よりす／隣みとる蒲公英短くして乳を泡せり」（春風馬堤ノ曲）を指しているよう。

ところで、掲出句は、同じ蒲公英でも、ぐっと現代的な新鮮さが

ある。ローンテニスとはテニスの正式な呼び名。テニスがわが国に入

ってきたのが明治十七、八年頃。それが高等師範学校の生徒間に広ま

り、さらに高等商業学校に伝習し、この両校の初の対抗試合が行われ、

人士間をにぎわしたのが三十一年のことといわれる。（増訂明治事

物起原）石井研堂） 掲出句はそんな社会状況を踏まえた作である。

燕村の詩にみえた淀川の毛馬堤に咲いていた蒲公英が、こゝでは、

ローンテニス場の白線のすぐ外側に咲いているという。印象明瞭な

作。たゞし、蒲公英は、燕村好みの子規が着目した花として、季語

の選択に燕村の蒲公英の幻影が揺曳しているように思う。

夏草やベースボールの人遠し 明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。夏、草に出る。新聞「日本」（明

治33・7・20）に「夏草」と題し載る。初出は、三十一年（一八九八）

十一月に行われた草十句集である。四季を問わず草を詠み込んだ句

を十句、句会幹事宛提出し、句稿清記後、会員の間に郵送する

というもの。このような十句集の試みは、子規が、「新花摘」（燕村）

の一題十句の形態をみるに及んで感心し、月次十句集と名づけ、明

治二十九年（一八九六）四月からはじめたもので、草十句は第三十二

回目にあたる。幹事は子規、参加者は、上原三川他十一名。子規は

春三句、夏二句、秋三句、冬二句合計十句出句。夏は掲出句の他に、

水草の花の白さよ宵の雨

右の句はなかなかいい句で、この年の佳句として推奨に価しよう。

さて、掲出句は夏草が三夏の季語。措辞にむずかしい語はないが、

ベースボールの人を眼前にしているとるか想念の中の世界とみるかによって句意は異なる。前者の解だと、繁茂する夏草のかなたにベースボールに興じる人々をみて、ふと、好きな野球にも加わるこゝろができないわが身をかえりみたものと受けとれる。後者の見方は、眼前に見えるのは、夏草のみ。夏草をみるにつけて、むかし、草原でうち興じたベースボール風景を想い浮かべ、いまや足腰きかないわが身のさまと比べ、「ベースボールの人遠し」と率直に、さみしさを吐露したもの。

こゝでは、夏草もベースボールも眼前の実景とみて、前者の意ととっておきたい。

掲出句は、ベースボールが詠まれた、もともとも早い時期の句であるが、子規がなぜ、ベースボールを句材にしたのか、子規とベースボールとのかわりを注記しておきたい。

君島一郎によると、明治十九年（一八八六）大学予備門の寄宿舎報に「赤組は正岡常規氏と岩岡保作氏と交互にピッチとキャッチになられ云々」（『子規全集』第一〇巻月報）とある由。子規の「ベースボール狂」（大谷是空、「日本」明治35・9・26）時代とでもいうべき二年間のはじまりである。予備門は十九年四月に第一高等中学校と改称されるが、その神田一ツ橋の寄宿舎でも子規はチームを作り、要となるキャッチを得意とした。

二十年（一八八七）十二月二十五日一学期が終り、冬休みに入ると、神田美土代町の自由亭で演説会の後、寄宿舎に帰り、早速、ベースボールに興じる。翌年には、「Base-Ball」（『筆まか勢』第一編）とい

う一文を書き、壮健活発な男子の運動に最適であり、「ベースボール程愉快にみちたる戦争は他になかるべし」と、ゲーム運びを戦いにたとえて説いている。「此頃はベースボールにのみ耽りてバット一本球一個を生命の如くに思ひ居りし時なり（『新年二十九度』、「日本人」第13号、明治29・1）というわけで、翌二十二年（一八八九）に、帰郷の折も、バット一本球一個を持参し、碧梧桐に教え、松山にベースボールが広まるきっかけをつくっている。小説「山吹の一枝」（明治23年稿）に、ベースボールを上野の広場にて行う「投球会」なる一章をもうけたり、バットを持ったユニホーム姿の写真を友人是空に送り、得意になったりもしている。

新聞「日本」に三回にわたりベースボールの競技を詳細に紹介したのが二十九年である。そのきっかけは、一高選手と横浜のアメリカ人チームとの対抗試合で、四勝一敗という勝利をおさめた後輩の活躍に、病床の子規が筆を藉りての声援を送ったものと思われる。その記事の巻末（新聞「日本」7・27）にベースボール未だ曾て訳語あらずと子規は記しているが、前年二十八年（一八九五）には一高校友会雑誌号外として「野球部史」（編纂主任中馬庚^{ちゅうまのあき}）が発行され、訳語野球が用いられた。子規が野球の名付け親との伝説は、子規の野球好きにからめて長い間喧伝されていたが、そのうわさの出所は碧梧桐の子規回想録からで、いわば身置のなせるわざである。

たゞ、子規がいかに野球の普及に熱心であったかの証左として、ベースボールのポジションの訳語一覧を次に紹介しておきたい。

| | | | |
|--------|-----------------------------|----------|--------------------------|
| 原語 | 子規の訳語 | 原語 | 子規の訳語 |
| ピッチャー | 投手 <small>うちや</small> | バッター | 打者 <small>だしや</small> |
| キャッチャー | 攪者 <small>かくしゃ</small> | ランナー | 走者 <small>そうしゃ</small> |
| ファースト | 第一基人 <small>だいいちきじん</small> | フォアボール | 四球 <small>よんきゆう</small> |
| セカンド | 第二基人 | デッドボール | 死球 <small>しきゆう</small> |
| サード | 第三基人 | フライボール | 飛球 <small>ひきめう</small> |
| ショート | 短遮 <small>たんじゆ</small> | ダイレクトボール | 直球 <small>ちよくきゆう</small> |
| レフト | 場左 <small>じようさ</small> | ホームベース | 本基 <small>ほんき</small> |
| センター | 場中 <small>じようちゆう</small> | フルベース | 満基 <small>まんき</small> |
| ライト | 場右 <small>じようゆう</small> | | |

右の訳語中、打者、走者、四球、死球、直球などは子規の用いた語がいまに生かされている。

ところで、以上のように、子規のベースボールに賭けた若い日を辿ってみると、いま、病床に釘づけの身となっている現実との違いに、子規自身、表現すべきことは失っている。「ベースボールの人遠し」という一見、単純な表現の背後に、どれだけの思いが托されているのか。

ベースボールはわが青春の情熱の塊。二度と戻らない若き日を子規は眼前の夏草のかなたに、じっと見据えているのである。

かつて夏草に、無常迅速という流転の相を觀したのは、芭蕉であつ

た。子規の夏草は、移ろいゆく実存としての夏草ではない。目の前に青々と繁茂する夏草そのものであるが、一句を何回も読んでみると、「ベースボールの人遠し」という茫洋とした思いが上句の夏草にも及んで、翳るように夏草に悲愁がまといつく。これは、子規の意識を超えた生きる者のまぬがれがたい悲しみのようなもの。単純なればこそ、子規の句は人間の普遍的な無意識を宿す器のようなところがある。

子規がなぜ、明治三十一年に、掲出句のようなベースボールの句を作ったものか、その作句要因ははっきりしない。

わが国における野球の始めは、明治四年（一八七二）、鉄道局技師平岡熙が汽車製造法研究のため渡米し、同六年に帰朝する。その折に携えてきたバットと三個のボールがそもその基だという（補明治事物起原「石井研堂」）。世上に野球熱を高めたのは、先述の第一高等中学校と横浜のアメリカ人チーム（アマチュア倶楽部）との国際試合で、一高の大勝は、三十六年（一九〇三）までつづく。この年以來、早稲田、慶応の二大学が、これに代ることになる。

子規が「ベースボールの歌」九首を新聞「日本」（明治31・5・24）に掲げたのも、掲出句と同じ年。同一素材を一方は俳句に、他方は短歌にという、表現詩型の相違を比べるためにも、次に示す。

ベースボールの歌

久方のアメリカ人のはじめにしベースボールの面白きかな
 国人ととつ国人とうちきそふベースボールを見ればゆゝしも

若人のすなる遊びはさはにあれどベースボールに如く者はあらじ
 九つの人九つのあらそひにベースボールの今日も暮れけり
 今やかか三つのベースに人満ちてそごろに胸のうちさわぐかな
 九つの人それぞれに場をしめてベースボールの始まらんとす
 うちあぐるボールは高く雲に入りてベースを人の行きぞわづらふ
 うちあぐるボールは高く雲に入りて又落ち来る人の手の中に
 なかなかのうちあげたるは危かり草行く球のとどまらなくに
 右の九首の中には「竹乃里歌」において添削される歌もあるが、
 初出の形を示した。俳句と短歌の表現内容の違いをいうと、短歌は
 九首ともベースボールの説明に終始している。その点、俳句詩型の
 掲出句の方に、作句年月に即した、明確な主張が読みとれることは、
 上述の通りである。

文机に顔押しつけて昼寝哉 明治31年

『俳句稿』（明治三十一年）所収。夏、人事に出る。新聞「日本」
 （明治32・8・4）に「昼寝」と題し載る。後に『春夏秋冬』春之部
 に入る。表記は結句が「昼寝かな」とある。昼寝が三夏の季語。子
 規には昼寝の句が五十七句あり、初期から晩年までにわたるが、と
 りわけ、三十一年（一八九八）は十四句と多い。

文机ぶんきは本を読んだり書き物などのために使う和風の机。

文机に向っていたが、いつか顔を押しつけたまゝ昼寝をしている
 ことよとの意。

真夏のさなか、疲れが出て、読書していた書物や書き物に顔をう

つ伏せに押しつけ、昼寝をしてしまうことがある。選句、俳句分類、
 執筆、読書と深更まで仕事に没入する子規にとって、その分、日中
 にどっと眠気に襲われることは想像に難くない。子規は、伸びない
 左膝を入れるため、六寸角の切込みをもった文机を愛用していたと
 いう。文机の音「FuZuKu」のu音のひびきがやさしく、快い。
 文人のしずかな日常を詠んでいるが、「顔押しつけて」という、ゆ
 がんだ顔がほうふつとする表現に、しずかな日常のうちに秘められ
 たはげしさを感ずるのである。同じ年の昼寝の句で、こんな句にも
 注目した。

昼寝さめて腕さするや畳の目

これも、いささか寝相が悪かったのである。

受付日 一九九二年十月二十三日